

-----  
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ  
(例) 浅草《あさくさ》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号  
(例) 一時|正気《しょうき》を失った

[ # ]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定  
(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)  
(例) [ # 「ㄅ<タ」、第3水準1-14-76 ]

-----  
「浅草《あさくさ》の永住町《ながすみちょう》に、信行寺《しんぎょうじ》と云う寺がありますが、いえ、大きな寺じゃありません。ただ日朗上人《にちろうしょうにん》の御木像があるとか云う、相応《そうおう》に由緒《ゆいしょ》のある寺だそうです。その寺の門前に、明治二十二年の秋、男の子が一人捨ててありました。それがまた生れ年は勿論、名前を書いた紙もついていない。何でも古い黄八丈《きはちじょう》の一つ身にくるんだまま、緒《お》の切れた女の草履《ぞうり》を枕に、捨ててあったと云う事です。

「当時信行寺の住職は、田村日錫《たむらにっそう》と云う老人でしたが、ちょうど朝の御勤めをしていると、これも好《い》い年をした門番が、捨児《すてご》のあった事を知らせに来たそうです。すると仏前に向っていた和尚《おしょう》は、ほとんど門番の方も振り返らずに、「そうか。ではこちらへ抱《だ》いて来るが好い。」と、さも事もなげに答えました。のみならず門番が、怖《こ》わ怖《ご》わその子を抱いて来ると、すぐに自分が受け取りながら、「おお、これは可愛い子だ。泣くな。泣くな。今日《きょう》からおれが養ってやるわ。」と、気軽そうにあやし始めるのです。この時の事は後《のち》になっても、和尚鼻唄《おしょうびいき》の門番が、櫛《しきみ》や線香を売る片手間《かたでま》に、よく参詣人へ話しました。御承知かも知れませんが、日錫和尚《にっそうおしょう》と云う人は、もと深川《ふかがわ》の左官だったのが、十九の年に足場から落ちて、一時|正気《しょうき》を失った後《のち》、急に菩提心《ぼだいしん》を起したとか云う、でんぼう[ # 「でんぼう」に傍点 ] 肌の畸人《きじん》だったのです。

「それから和尚はこの捨児に、勇之助《ゆうのすけ》と云う名をつけて、わが子のように育て始めました。が、何しろ御維新《ごいしん》以来、女気《おんなけ》のない寺ですから、育てると云ったにした所が、容易な事じゃありません。守《も》りをするのから牛乳の世話まで、和尚自身が看經《かんきん》の暇には、面倒を見ると云う始末なのです。何でも一度なぞは勇之助が、風か何か引いていた時、折悪く河岸の西辰《にししたつ》と云う大檀家《おおだんか》の法事があったそうですが、日錫和尚は法衣《ころも》の胸に、熱の高い子供を抱《だ》いたまま、水晶《すいしょう》の念珠《ねんじゅ》を片手にかけて、いつもの通り平然と、読經《どきょう》をすませたとか云う事でした。

「しかしその間《ま》も出来る事なら、生みの親に会わせてやりたいと云うのが、豪傑《ごうけつ》じみても情《じょう》に脆《もろ》い日錫和尚の腹だったのでしょう。和尚は説教の座へ登る事があると、今でも行って御覧になれば、信行寺の前の柱には「説教、毎月十六日」と云う、古い札《ふだ》が下《さが》っていますが、時々和漢の故事を引いて、親子の恩愛を忘れぬ事が、即ち仏恩をも報ずる所以《ゆえん》だ、と懇《ねんごろ》に話して聞かせたそうです。が、説教日は度々めぐって来ても、誰一人進んで捨児の親だと名乗って出るものは見当りません。いや勇之助が三歳の時、たった一遍、親だと云う白粉焼《おしろいや》けのした女が、尋ねて来た事がありました。しかしこれは捨児を種に、悪事でもたくらむつもりだったのでしょう。よくよく問い質《ただ》して見ると、疑わしい事ばかりでしたから、癪癖《かんぺき》の強い日錫和尚は、ほとんど腕力を振わないばかりに、さんざん毒舌を加えた揚句《あげく》、即座に追い払ってしまいました。

「すると明治二十七年の冬、世間は日清戦争の噂に湧き返っている時でしたが、やはり十六日の説教日に、和尚が庫裡《くり》から帰って来ると、品《ひん》の好《い》い三十四五の女が、しとやかに後《あと》を追って来ました。庫裡には釜をかけた囲炉裡《いろり》の側に、勇之助が蜜柑《みかん》を剥《む》いている。その姿を一目見るが早いか、女は何の取付《とつ》きもなく、和尚の前へ手をつけて、震える声を抑えながら、「私《わたし》はこの子の母親でございますが、」と、思い切ったように云ったそうです。これにはさすがの日錫和尚も、しばらくは呆気《あっけ》にとられたまま、挨拶《あいさつ》の言葉さえ出ませんでした。が、女は和尚に頓着なく、じっと畳を見つめながら、ほとんど暗誦でもしているようにと云って心の激動は、体中《か

らだじゅう》に露《あら》われているのですが 今日《こんにち》までの養育の礼を一々 | 叮嚀《ていねい》に述べ出すのです。

「それがややしばらく続いた後《のち》、和尚は朱骨《しゅぼね》の中啓《ちゅうけい》を挙げて、女の言葉を遮《さえぎ》りながら、まずこの子を捨てた訳を話して聞かすように促しました。すると女は不相変《あいかわらず》畳へ眼を落したまま、こう云う話を始めたそうです

「ちょうど今から五年以前、女の夫は浅草田原町《あさくさたわらまち》に米屋の店を開いていましたが、株に手を出したばっかりに、とうとう家産を蕩尽《とうじん》して、夜逃げ同様 | 横浜《よこはま》へ落ちて行く事になりました。が、こうなると足手まといなのは、生まれたばかりの男の子です。しかも生憎《あいにく》女には乳がまるでなかったものですから、いよいよ東京を立ち退《の》こうと云う晩、夫婦は信行寺の門前へ、泣く泣くその赤子を捨てて行きました。

「それからわずかの知るべを便りに、汽車にも乗らず横浜へ行くと、夫はある運送屋へ奉公をし、女はある糸屋の下女になって、二年ばかり二人とも一生懸命に働いたそうです。その内に運が向いて来たのか、三年目の夏には運送屋の主人が、夫の正直に働くのを見こんで、その頃ようやく開け出した本牧辺《ほんもくへん》の表通りへ、小さな支店を出させてくれました。同時に女も奉公をやめて、夫と一しょになった事は元より云うまでもありますまい。

「支店は相当に繁昌《はんじょう》しました。その上また年が変ると、今度も丈夫そうな男の子が、夫婦の間《あいだ》に生まれました。勿論悲惨な捨子の記憶は、この間も夫婦の心の底に、蟠《わだかま》っていたのに違いありません。殊に女は赤子の口へ乏しい乳を注ぐ度に、必ず東京を立ち退《の》いた晩がはっきりと思い出されたそうです。しかし店は忙《いそが》しい。子供も日に増し大きくなる。銀行にも多少は預金が出来た。

と云うような始末でしたから、ともかくも夫婦は久しぶりに、幸福な家庭の生活を送る事だけは出来たのです。

「が、そう云う幸運が続いたのも、長い間の事じゃありません。やっと笑う事もあるようになったと思うと、二十七年の春 | [ # 「ㄅ」夕、第3水準1-14-76 ] 々《そうそう》、夫はチブスに罹《かか》ったなり、一週間とは床《とこ》につかず、ころりと死んでしまいました。それだけならばまだ女も、諦《あきら》めようがあったのですが、どうしても思い切れない事には、せつかく生まれた子供までが、夫の百《ひゃっ》ヶ日《にち》も明けない内に、突然 | 疫痢《えきり》で歿《な》くなった事です。女はその当座昼も夜も気違いのように泣き続けました。いや、当座ばかりじゃありません。それ以来かれこれ半年《はんとし》ばかりは、ほとんど放心同様な月日さえ送らなければならなかったのです。

「その悲しみが薄らいだ時、まず女の心に浮んだのは、捨てた長男に会う事です。「もしあの子が達者だったら、どんなに苦しい事があっても、手もとへ引き取って養育したい。」 そう思うと矢も楯《たて》もたまらないような気がしたのでしょう。女はすぐさま汽車に乗って、懐しい東京へ着くが早いか、懐しい信行寺《しんぎょうじ》の門前へやって来ました。それがまたちょうど十六日の説教日の午前だったのです。

「女は早速 | 庫裡《くり》へ行って、誰かに子供の消息《しょうそく》を尋ねたいと思いました。しかし説教がすまない内は、勿論和尚にも会われますまい。そこで女はいら立たしいながらも、本堂一ぱいに詰めかけた大勢の善男善女《ぜんなんぜんにょ》に交《まじ》って、日錡和尚《にっそうおしょう》の説教に上《うわ》の空《そら》の耳を貸していました。 と云うよりも実際は、その説教が終るのを待っていたのに過ぎないのです。

「所が和尚はその日もまた、蓮華夫人《れんげふじん》が五百人の子とめぐり遇った話を引いて、親子の恩愛が尊《たっと》い事を親切に説いて聞かせました。蓮華夫人が五百の卵を生む。その卵が川に流されて、隣国の王に育てられる。卵から生れた五百人の力士は、母とも知らない蓮華夫人の城を攻めに向って来る。蓮華夫人はそれを聞くと、城の上の楼《たかどの》に登って、「私《わたし》はお前たち五百人の母だ。その証拠はここにある。」と云う。そうして乳を出しながら、美しい手に絞《しぼ》って見せる。乳は五百 | 条《すじ》の泉のように、高い楼上の夫人の胸から、五百人の力士の口へ一人も洩《も》れず注がれる。 そう云う天竺《てんじく》の寓意譚《ぐういたん》は、聞くともなく説教を聞いていた、この不幸な女の心に異常な感動を与えました。だからこそ女は説教がすむと、眼に涙をためたまま、廊下《ろうか》伝いに本堂から、すぐに庫裡へ急いで来たのです。

「委細《いさい》を聞き終った日錡和尚は、囲炉裡《いろり》の側にいた勇之助《ゆうのすけ》を招いで、顔も知らない母親に五年ぶりの対面をさせました。女の言葉が嘘でない事は、自然と和尚にもわかったのでしょう。女が勇之助を抱き上げて、しばらく泣き声を堪《こら》えていた時には、豪放濶達《ごうほうかつたつ》な和尚の眼にも、いつか微笑を伴った涙が、睫毛《まつげ》の下に輝いていました。

「その後《ご》の事は云わずとも、大抵御察しがつくでしょう。勇之助は母親につれられて、横浜の家へ帰りました。女は夫や子供の死後、情《なさけ》深い運送屋主人夫婦の勸《すす》め通り、達者な針仕事を人に教えて、つつましいながらも苦しくない生計を立てていたのです。」

客は長い話を終ると、膝《ひざ》の前の茶碗をとり上げた。が、それに唇は当てず、私《わたし》の顔へ眼をやって、静にこうつけ加えた。

「その捨児が私です。」

私は黙って顔《うなず》きながら、湯ざましの湯を急須《きゅうす》に注《つ》いた。この可憐な捨児の話が

、客 | 松原勇之助《まっぱらゆうのすけ》君の幼年時代の身の上話だと云う事は、初対面の私にもとうに推測がついていたのであった。

しばらく沈黙が続いた後《のち》、私は客に言葉をかけた。

「阿母《おっか》さんは今でも丈夫ですか。」

すると意外な答があった。

「いえ、一昨年 | 歿《な》くなりました。      しかし今御話した女は、私の母じゃなかったのです。」

客は私の驚きを見ると、眼だけにちらりと微笑を浮べた。

「夫が浅草田原町《あさくさたわらまち》に米屋を出していたと云う事や、横浜へ行って苦労したと云う事は勿論 | 嘘《うそ》じゃありません。が、捨児をしたと云う事は、嘘だった事が後に知れました。ちょうど母が歿《な》くなる前年、店の商用を抱えた私は、      御承知の通り私の店は綿糸の方をやっていますから、新潟界限《にいがたかいわい》を廻って歩きましたが、その時田原町の母の家の隣に住んでいた袋物屋《ふくろものや》と、一つ汽車に乗り合せたのです。それが問わず語りに話した所では、母は当時女の子を生んで、その子がまた店をしまう前に、死んでしまったとか云う事でした。それから横浜へ帰って後、早速母に知れないように戸籍謄本をとって見ると、なるほど袋物屋の言葉通り、田原町にいた時に生まれたのは、女の子に違いありません。しかも生後 | 三月目《みつきめ》に死んでしまっているのです。母はどう云う量見《りょうけん》か、子でもない私を養うために、捨児の嘘をついたのです。そうしてその後二十年あまりは、ほとんど寝食さえ忘れるくらい、私に尽してくれたのです。」

「どう云う量見か、      それは私も今日《こんにち》までには、何度考えて見たかわかりません。が、事実は知れないまでも、一番もっともらしく思われる理由は、日錡和尚の説教が、夫や子に遅れた母の心へ異常な感動を与えた事です。母はその説教を聞いている内に、私の知らない母の役を勤《つと》める気になったのじゃありませんまいか。私が寺に拾われている事は、当時説教を聞きに来ていた参詣人からでも教わったのでしょうか。あるいは寺の門番が、話して聞かせたかも知れません。」

客はちょっと口を噤《つぐ》むと、考え深そうな眼をしながら、思い出したように茶を啜《すす》った。

「そうしてあなたが子でないと云う事は、      子でない事を知ったと云う事は、阿母《おっか》さんにも話したのですか。」

私は尋ねずにはいらなかった。

「いえ、それは話しません。私の方から云い出すのは、余り母に残酷《ざんこく》ですから。母も死ぬまでその事は一言《いちごん》も私に話しませんでした。やはり話す事は私にも、残酷だと思っていたのでしょうか。実際私の母に対する情《じょう》も、子でない事を知った後《のち》、一転化を来したのは事実です。」

「と云うのはどう云う意味ですか。」

私はじっと客の目を見た。

「前よりも一層なつかしく思うようになったのです。その秘密を知って以来、母は捨児の私には、母以上の人間になりましたから。」

客はしんみりと返事をした。あたかも彼自身子以上の人間だった事も知らないように。

[ # 地から 1 字上げ ] ( 大正九年七月 )

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987 ( 昭和62 ) 年1月27日第1刷発行

1993 ( 平成5 ) 年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971 ( 昭和46 ) 年3月 ~ 1971 ( 昭和46 ) 年11月

底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」( 区点番号5-86 ) を、大振りにつくっています。

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 ( <http://www.aozora.gr.jp/> ) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。